

荒廃農地 ハーブ畑に

静岡県函南町の農業生産法人・日本豊受自然農は、荒廃農地を開墾し、農地に戻す活動に力を入れている。6月中旬に伊豆の国市の荒廃農地を開墾したハーブ畑で収穫祭を行い、地元住民や東京などから参加した60人がエキネシアの花摘みを楽しんだ。

同法人は、静岡県函南町や北 伊豆の国市、伊東市の計14町で米や野菜、ハーブなどを生産する。



満開に咲いたエキネシアの花を摘み取る参加者

今回開墾した荒廃農地は、伊豆の国市葦山金谷地区の1・2号。市の紹介で農地中間管理機構(農地バンク)を通じて買い取った。

長い間、耕作放棄されたため3センチのアシが生い茂り、除草剤を使わずに除草機や手作業で取り除くのが大変だったという。竹粉や落ち葉、除草した草に600種類の菌を加えて作った堆肥をまいて土壌を改良。2年がかりで農地に戻した。

復活させた水田は、水が抜けてしまって米作りができない一方で、ぬかるんで畑にも不向き。そこで北米原産の多年草で、原住民が薬草として使って

静岡県函南町 日本豊受自然農 2年がかりで土壌改良

きた「エキネシア」が湿気にも強いことから、30センチに植えたところ満開となった。イノシシの被害も受けないという。収穫した花は、ハーブ茶や酵素などに加工して販売する予定だ。

金谷地区出身の岩本大和さん(24)は、荒廃農地に昔の水田風景がよみがえり、モリアオガエルなどの生き物が戻ってきたことに感動し、今年から同法人に就職した。岩本さんは「子どもが本気で働いて地元で働けることが本望にうれしい」と喜ぶ。

由井寅子代表は「今後も放棄地をよみがえらせて面積を増やし、生態系豊かな土地に花などを植え、人々が集まる観光地にしていきたい」と話す。

来賓としてあいさつした伊豆の国市の山下正行市長は「世界全体で食料危機が叫ばれる中、日本の食料安保を考えると、増え続ける耕作放棄地を元に戻し利用していく必要がある」と話した。